

せいけん
詩集

第三十三篇

作：近藤せいけん

「幸運 その二」

小田急線本厚木の駅前のベンチ

一人の男が 腰をおろして だれかと話をしていた

ただ道ゆく人には 話の相手は見えない

「今のあなたは幸せですか 不幸ですか 答えて下さい」

ふつと 男は息をはいた

「今のお前から 二〇数年 あまり幸せな事はなかった」

「どちらかといえば 不幸のほうが多かった」

若者はじつと 未来の自分を見つめていた

「どうしてですか?」「なぜ 不幸のほうが多いのですか?」

「どうしてか 解からない 一口にいえば 運がないんだ ついてないんだ」

「それだけですか」「それ以外考えられない 俺はツキの神から見放されているんだ」

『寂しい 人生ですね』『他の生き方はなかったのですか』

男は下を向いて うなだれていた

「さて 未来の私 人生はいつでも 変えられます」

「でも お前 俺はもう 五〇過ぎだぞ 変えられまい」

「いいえ いつでも 変えられます 今日からでも」

「どうやって?」「古い考えを捨てるのです 新しい考えを実行するのです」

「幸せに向かつて 歩き始めれば 必ずそうなります」